

TEXT KING

written by HADEYA

PROLOGUE MAN

小説も何もかも目茶目茶で良いのだ。メッチャメチャな感じが良いのだ。だからこそ俺はドアを開けた——そのドアを。ドアの向こうに待ち受けているのが何者であるか分かっていながら、だ。

ドアを蹴った時、真っ先に飛び込んだのは女の卑猥な顔とライフルの銃口（屑共は一発、決めて嫌がったのだ！）。立て続けに複数の銃声がかして、二人共、脳味噌を吹っ飛ばされた。

……だから、どうしたって言うんだ。血が出たから何だ。脳味噌が吹っ飛んだから何だ。飛び散った連中の血と脳で壁に書き殴ってやったさ。

大学出の豚野郎、ってな。

連中のブツと金をカッパらい、俺は眠らない街へ繰り出した。
はっ！ 最高の序文だろう！

狂・気・電・線

ブレーキペダルが言う事を聞かない。
気付いたらフロントガラスを突き破っていた。そこで死ぬと思いきや、更にコンクリートへ直撃した。
二度の直撃。それから三度目の衝撃。
冥界のドアを突き破り、地獄街道まっしぐら。ブレーキペダルが言う事を聞かない。
「助けてくれ、気が狂いそうだ……」
悪魔が笑う。ぞっとする声で。俺は地獄を徨い続けた。
一筋の光が見えた時、あっと驚く事が起きた——輪廻転生。俺は脳を損傷して子宮から這い出た。

STARVATION

舞台は深夜のシカゴ。その夫婦は宝くじを当てた。当選金額は百三十二億円。相続権を巡って口論となった。
トーニャが金切り声を上げた。
「番号を選んだのは私よ！ 一円も渡さないわ！」
亭主のアントニオも負けていない。
「券を買ったのは俺だ！ 全部、俺の物だ！」

「大体、あんた働きもしないで——」

「うるせえ！ ガタガタ抜かすとブチ殺すぞ、コックサッカー！」

彼女はキッチンのアイスピックを掴んだ。彼はテーブルのワイン・ボトルを壁で割った。おぞましい悲鳴が深夜のシカゴを引き裂く。

二人の壮絶な殺し合いを息子である、ミッキィ・ロバートソンはドアの隙間から見ていた。返り血で真っ赤に染まったトーニャが静かに呟く。

「……出て来なさい」

ミッキィは動けずにいた。アイスピックのグリップを握り、トーニャは唯一の目撃者に接近した。ドアを開け、愛する我が子を見下しながら優しい口調で告げた。

「あいつが暴力を振るったから仕方なく殺したの。でしょう？」

ミッキィは何も言えずにいた。

「でしょう！」

ミッキィはビクッと反応した。トーニャは我が子の頭を抱き寄せた。

「私達、お金持ちよ」

アイスピックは息子の目の高さにある。これでママを殺そう——頭脳明晰なミッキィは考えた。大金を手にしたママはしてはいけない事をする筈。警察も、してはいけない事をする筈。

ミッキィはトーニャの手に掴み掛かった。

「何をするの！」

トーニャが叫んだ。ミッキィはアイスピックを奪うべく、ママの手に噛み付いた。深夜のシカゴは記録的な吹雪だった。

HARDCORE

キャラクターイメージを覆す。何もかもブツ壊す。

*

ドアを蹴破った——社長は……浮気野郎は目の前でフェラチオされて嫌がる。鼻の頭にコカインの残粉を乗せながら。

「な、何をしている！ 取引中だぞ！」

「そう。取引中だよ、私も。辞職の、な！」

付近のオフィス・チェアを掴んで、ブン投げた。大きな音と共に壁の抽象画が落下しそうになる。

……事の経緯は昨晚。ハッキングで事実を知った。

全力で支えて来た社長の裏帳簿。組織を裏切り、副収入を得ていた。

.....許せなかった。スタッフが安月給で貢献しているのに取締役だけが違法な副収入を得て、惚けている。それだけではない。次々と明るみになる疚しい事実。ざけんじゃねえぞ！
——落下した壁の抽象画を踏み付け、怒鳴りながら辞職した。

*

今、私は留置場にいる。赤坂七番の呼び名で。
このままヘルに行くのも知れない。上等だ。私は許さない。

内なる炎が燃えている。〈独自正義〉と言う名の炎が。
私の名は垂希。私の願いは、たった一つ——

屈強。そして媚び、諂わない事。

HEART SHOT

ジェットライターで点火する。責任転嫁じゃないぜ。煙草に火を点けたんだ(ニヤリ)。
白煙を吸い込み、パソコンのディスプレイを見詰める。一体、何を描くのか。一体、何を伝えるのか。
考える。じっくり考える。やがて活路を見出した。俺は——

マシンガンのようにキーボードのキーを乱れ打った。打って打って、打ちまくる。
.....そうとも俺は依存症だ。キカタカタ依存症。
構うものか。俺は入力する。それが持って生まれた俺の本能——テキスト・キング。

メディアプレイヤーを起動し、ハードロックを再生した。インスピレーションが走る。目まぐるしく脳内を駆け巡る。
キキを乱れ打った。血走った眼差しで。

*

夜の森に俺はいる。獲物が動いた。俺は手にしているピストルのトリガーを夢中で引いた。獲物を仕留める為、俺はトリガーを引き続けた。

800 DEGREES

他人を殺めた。この苦しみ。
俺は許せない。自分が。

「昔のお前なら、やってた」

友が言う。そう、昔の俺なら、やっていた。

次の瞬間、俺は手にしている煙草の穂先を握り潰した。右掌で。俺自身の細胞で。

誓いの温度は800°———

二度と命を弄ばない事を、俺は誓った。

NEXT TOP MODEL

……私は思う。世界を根底から覆せないか、と。犯罪と暴力の蔓延する世界、恐怖と絶望が支配する醜悪な世界を。

答えは一つ。武力行使。綺麗事でなく、行動だけが世界を変える。

銃声。

最小限のモーションで銃弾を回避する。背後で銃弾が散解し、周囲がざわめく。

男の目を見た。その眼差しは邪悪に満ちている。

拳の関節を鳴らした。全身から昇るオーラが広がって行く。この男を殺す。意は固い。その固さは世界最高強度。

ふとダンスフロアを見た。若い女性がレイヴしている。その光景を目に焼き付ける。

曲が激しくなり、クライマックスを迎える。

右上から振り下ろすように男の顔面を殴打した。一撃必殺。

ダンスフロアの女性と私の内面は完全に一致している。内なる炎と内なる野獣のせめぎ合い。この時、私は

———

活路を見出した。

BATTLE STREET

池袋は東京都豊島区に属する若者文化の情報発信都市である。新宿、渋谷と並ぶ三大副都心の一つで巨大な百貨店や飲食店が乱立する。

神崎貴志はサンシャイン通りの歓楽街を歩いていた。煙草に火を点け、路上喫煙禁止の黄色い看板を見た。意味深。

最近は受動喫煙禁止の観点から路上喫煙の取締りが厳しくなっている。事実かも知れない。禁煙家にとって煙草は百害あって一利なし。

金は掛かるし健康は害するし、良い事はない。何も。それでも煙草は美味しい。煙草は人生を豊かにする。煙草は……

「すいません」

路上喫煙禁止のユニフォームを着用した男二人が声を掛けて来て神崎は止まった。

神崎は彼らを知っている。路上喫煙を取り締るフリーターだ。

右側に立つ初老の男性が言った。

「ここ、煙草を吸っちゃ駄目ですよ」

「知ってる」

神崎は答えた。二人の男性は神崎が何者か知らないようだ。この界限で神崎貴志を知らなければ潜りである。

「捨てるから勘弁してくれ」

「そうも行かないんですよ。罰金五千元。豊島区のルールなんです」

「俺は——」

無職のホームレス。神崎は謎に満ちた男である。友達皆無、過去不明。二枚目で東大卒。

「——金がねえんだ」

神崎は言った。

「ルールはルールですから。免許証か何かお持ちですか？」

「ホームレスだから何も持っちゃいないよ」

「本当にホームレスですか？」

「どう言う意味だ？」

「タバコを買うお金はあるみたいですが……」

神崎は気の短い男である。切れると何をするか分からない男でもある。

「五百円くらい持ってるに決まってるだろうが。それとも何か？ ホームレスは五百円をもちやいけないってのか？
それが区長のイデオロギーか？」

神崎はイデオロギーに熱い人間である。そして危険思想家でもある。

「豊島区長、高田桂太郎のイデオロギーには疑念を抱かざるを得ない。その根底にあるのは特定の世論と行動を誘導する意図を持った宣伝行為——つまりプロパガンダに他ならない。ただの宣伝戦略、世論戦略だろう。それに対する俺の基本スタンスはこうだ。ケツの穴を掃除しな。カウンタープロパガンダだよ」

「あの……」

「教えてやるよ」

神崎が短くなった煙草を指で弾く。弾いた煙草が右側の男性の頬に直撃した。

「な、何をする！」

突如、神崎は路上喫煙禁止の看板を掴むと、電柱へ投げ付けた。

「ざけんじゃねえぞ！」

マグマの怒りが爆発する。騒然とする池袋。その時、サンシャイン通りに車が突っ込んだ。車は神崎を跳ね、無差別に人を撥ねて行く。

暴走車の運転手は勿論、彼。鮮烈な序文を飾った<彼>だ。

……小説も何もかも目茶目茶で良いのだ。メッチャメチャな感じが良いのだ。だからこそ俺はサンシャイン通りに突っ込んだ——派手に。ド派手に。

結果、何が待ち受けているか分かっていながら、だ。車で人を跳ねた時、真っ先に見たのは泣き叫ぶ人々の恐怖に引き攀った青白い表情(屑共は懸命に逃げて嫌がる!)。立て続けに人を跳ね、周囲は阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

……だから、どうしたって言うんだ。地獄だから何だ。人を跳ねたから何だ。アクセルを踏みながら連中に向かって叫んでやったさ。

メデたい、クソ塗れのヤッピー共！ ってな。

片っ端から連中を跳ね、その場から俺は逃げ去った。

はっ！ 最高の小説だろう！

狂・気・感・染

アクセルを踏んだ。池袋サンシャイン通りを後にする。ご機嫌なドライブが始まった。

大麻がジョイントされた煙草に火を点け、行く宛てもないまま七号線を走った。パトカーのサイレンが聴こえる。車内ミラーを見た。一台のパトカーが後方にピタリと貼り付いていた。停車するよう指示を受けた。笑いながら、アクセルを踏み込んだ。

愛車を飛ばす。あれ？ ブレーキペダルが言う事を聞かないぞ。気付いたらフロントガラスを突き破っていた——狂・気・電・線。

MONEY QUEEN

ミッキイはアイスピックが握られたトーニャの右手に噛み付いた。

「痛い！」

トーニャが声を上げ、アイスピックを落とした。ミッキイはアイスピックを拾い、トーニャの前に立った。宥めるような口調でトーニャは言った。

「……返しなさい。ほら早く」

ミッキイは首を振った。

「ママはイケない事をする」

「しない」

「本当に？」

「本当。だから、それを返して」

ミッキィは躊躇いながらアイスピックを差し出した。アイスピックを受け取り、トーニャは我が子を抱き締めた。そして見た。メッタ刺しにされた虫の息のアントニオが自分にピストルを向けているのを。

トーニャは我が子を突き飛ばし、走って逃げた。背後で銃声がある。裸足で家の外へ出た。走った。凍て付く吹雪の中を。

突然、トーニャは立ち止まった。そして考えた。

もっと確実な方法がある——ミッキィが……息子がアイスピックで主人を刺したのだ。主人はピストルで反撃し、ミッキィは頭を撃たれた。それで万事、片が付く。トーニャは急いで来た道を引き返した。生き証人を消す為に。

息子が警察に電話したら取り返しの付かない事になる。トーニャの目は血走っている。唇は釣り上がっている。トーニャは全速力で我が家に向かっていった。

すべき事はたった一つ。指を添えて、トリガーを数センチ引く事……。

BLOCK

射撃場へ繰り出した。何て事ない日曜の屋下がり。街行く人間全員が敵に思えて来る。動物も電柱も何もかもが敵に見える。そりゃそうだ。今、俺は暗黒街で購入したばかりの幻覚剤〈龍の理由〉をキメているからな。街行く全員が敵に思える。何て事ない日曜の屋下がり。時刻は正午を回ったところだった。

新しいハンドガンが出回ってるらしいぜ——最近の話題はそれで持ち切り。新しい銃が欲しい。初恋気分で射撃場へ出向いた。果たして俺の右手にシッカリ来るハンドガンは見付かるだろうか……。

銃を撃つ。射撃場で。ところで最近の経済情勢と言え、関税の嵐が吹き荒れている。何でもアメリカの大統領は無人島にまで関税を掛けたらしい。ペンギンがどうやって税金を払うって言うんだ？ そりゃあ、デンデン虫も交尾をするわな(ニヤリ)。

的を絞る。絞って、絞って……その時だった。隣のイカレ野郎が銃を乱射したのは！！

慌てて逃げたさ。けど逃げられなかった。取っ組み合いになり、腕を取られた。激しい銃の奪い合いになり——

——バキューン！

野郎の顎下を撃ち抜いた。俺は……怖くなって下に向け、銃を乱射した。勿論、野郎の顔面に。

ふと手にしてるハンドガンを見た。銃の名は——シング19。龍の理由の幻覚作用は消え、俺はリアルな現実世界に引き戻された。覚醒したって、事。

路地裏でゴミ箱を撃ち、感覚を本能に焼き付けた。何度も、何度も。ゴミ箱を撃ち、感覚を本能に

焼き付けた。さあ、ワシントンへ向かおうか。

MANY PEOPLE DYING

キィィ！愛車が派手にクラッシュし……気付けば、俺は〈コックピット〉にいた。

「ここは思考核だ。俺自身の」

青白い信号が目まぐるしくスパークする。海馬を。俺は笑っている。俺は怒っている。高速で行き交う感情。その名は、

ハイスピード・ブルー。

右腕を上げた。巨大ロボット化した愛車も右腕を上げている。

ガトリング・ガンがけたたましく火を噴き、奴をハチの巣にした——

DJ KRUSHを。ありとあらゆる敵対勢力を。

*

キィを叩いた。突然、激しく。無言で只管、キィを打った。テンキィを、だ。

彼は天才数学者。研究テーマは円周率最後の数字。キィを叩いた。激しく激しく。キィを叩いた。テンキィを、だ。昼夜問わず、パソコンの前に座っている。テクノ・ミュージックをBGMに無言でキィを叩き続ける。キィを叩いた。激しく切なく。キィを叩いた。激しく切なく。キィを叩いた。激しく誇り高く。

止めようと思う。止める事など出来やしない。キィを殴りそうになった。寸前で思いとどまった。キィを叩く。己がキィとなり、キィを打つ。寡黙に過酷に打ちまくる。

キィを打った。打って打って、打ち損ねた。女が欲しい。世界が欲しい。キィが無機質なサウンドを奏でる。キィを叩いた。強く逞しく。キィが外れた。直して打った。色違いのキィを叩いた。

叩き続けた。キィを。黒いキィを。解明方法は数学ではない。エンドレスな数字であれば見切りを付けるべき。つまり自分が最後と思った数字が最後の数字なのだ。

再びキィを叩いた。女を抱くようにキィを叩いた。キィを殴った。叫びながらキィをブン殴った。パソコンを破壊する為、システム・クラッシュを引き越す為。二度とキィは打てない。俺自身が壊れたから……俺自身が狂っているからだ。誰も俺を止められない。警察であろうと、エイリアンであろうと。キィを叩いた。激しく激しく。

数字の9がディスプレイで静止し、俺は泣いた。(ア)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872